



夏目漱石さんぽ



教科書キャラクターの「なびねこ」のぬいぐるみを編集長が作りました。
国語の教科書教材でおなじみの夏目漱石。東京のゆかりの地を、一緒におさんぽしましょう！



編集O フクロウがすき。 編集K パンダがすき。 編集S カエルがすき。

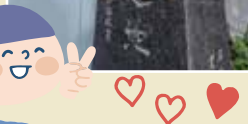
① 夏目漱石誕生の地

新宿区指定史跡

夏目漱石の生誕100年を記念して建てられた記念碑があります。



生家があった場所は、現在は飲食店です。生誕の地で、今ではだれでもごはんが食べられます！



③ 夏目漱石終焉の地(漱石公園)

新宿区指定史跡

富永直樹作の漱石胸像と、飼っていた生き物の墓である「猫の墓」と呼ばれる石塔があります。



漱石の飼っていた動物として有名な猫。1代目から3代目まで名前はなかったそうです！ほかにも犬や文鳥など、さまざまな動物をかわいがっていたようです。



東西線 早稲田駅

早稲田通り

至 神楽坂駅

② 夏目坂

夏目漱石の実父・直克が自らの姓にちなんで、「夏目坂」と名づけました。漱石は、勢力者の子でしたが、里子に出されるなど苦労の多い子ども時代を送りました。



「喜久井町」という町の名前も、直克が名づけたんだって。すごく力のある人だったんだね。



④ 新宿区立漱石山房記念館

漱石が1907(明治40)年9月から1916(大正5)年に亡くなるまでの9年間を過ごした家があった場所にあります。

(協力: 新宿区立漱石山房記念館 書斎内の家具・調度品・文具は、県立神奈川近代文学館の協力により再現。書棚の洋書は東北大学付属図書館の協力により、同館が所蔵する「漱石文庫」の蔵書の複製を撮影し、制作された。)

なびねここと行く
夏目漱石さんぽ



二次元コードから動画が見られます。

まとめ

ほかにも小説に出てくる場所がたくさんあり、本の世界に入りこんだ気分が散歩ができました。



中学国語通信

Vol.8

教育出版



みちしるべ



中学校の先生がたへのエール！

令和7年度から新しい教科書で授業をされる中学校の先生がたへ
編集委員の児玉忠先生からのエールをお届けします。



Q2 中学生は、どのようにすればその力を身につけることができるのでしょうか？

これまで学んだことを使って
自分なりに試行錯誤してみること

2年『走れメロス』の学習を例に考えてみましょう。この作品を初めて読むと、いろいろな「問い」が生まれてきます。メロスはどのように友人を人質にするような約束を王と交わしたのだろう、王はどのようにあんなに人を信じられなかったのに、最後にメロスに「わしをも仲間に入れてくれまいか。」などと言ったのだろう、などです。こうした「問い」が、作品を読み深める起点になります。

そのとき、これまで授業で学んできたことを使ってこの「問い」を解決できないかと考えてみるのです。例えば、登場人物はどんな「人物像」として描かれているか、それらの「人物の心情」はどこでどう変化しているか、そうした変化をとおしてこの「作品が描こうとしていること」は何か、などが考えられます。これまで学んだことを使って作品を読み深め、生じた「問い」に自分なりにチャレンジしてみることが大切です。



宮城教育大学 教授
こ だ ま た だ し
児 玉 忠

PROFILE

1962年北海道生まれ。弘前大学教育学部助教授、教授を経て現職。専門は国語科教育(詩教育、作文教育)。好きなフルーツはサクランボ。

Q1 今、中学生が身につけるべき国語の力とは、どのようなものなのでしょうか？

自分で問いを立てて
自分に合ったやり方でその問いを解決する力

正解のない不確かな未来を生きる中学生にとって、示された課題に対して早く正確に正解する力を身につけるだけではきっと不十分でしょう。気になっていることや興味をもったことなどから自分で「問い」を立てて、その問いの答えを自分に合った得意なやり方で見つけ出していく力が必要です。

Q3 中学校の先生がたへ、エールをお願いします！

生徒たち一人一人が学び方を選択・工夫し
表現・活用する学習体験を

授業時数が足りないことにいつも苦労している国語科の授業では、どうしても「理解・習得」の指導に力点をおくことに終始しがちです。たしかに、小学校に比べて学習者の学力差が広がっている中学校段階では、「理解・習得」に指導の力点ををかざるをえません。しかしながら、そうした授業や単元の中に、生徒たちが学び方を選択・工夫し、試行錯誤しながら「表現・活用」する場面を今以上に積極的に設定してみたいかがでしょうか。

私は日々大学生と向き合って仕事をしていますが、彼らが中学校の授業を振り返って、記憶や印象に残っていたり、自分にとって有益だったと感じていたりする学習体験のほとんどは、「理解・習得」よりも「表現・活用」の学習体験でした。そうした学習体験は、私たち指導者が思う以上に、一人一人の学習者の中に長い期間にわたって深くしみこんでいるのです。

授業時間のやりくりや学力保障などには引き続き苦労が伴いますが、授業の質を高めるそうした指導の工夫に引き続き取り組んでいきたいものです。

中学国語通信

Vol.8

みちしるべ

中学国語通信 みちしるべ Vol.8 2025(令和7)年4月発行

教育出版株式会社 教育DX編集本部 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館 TEL:03-5579-6278(代表)

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとり、配布を許可されているものです。

生徒の「国語ムズカシイ」を「おもしろそう!」にする

先生のひとこと

情報のすき間を
埋めてオリジナル
ストーリーを作ってみよう!

3年『和歌の調べ』

例えば「五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という歌では、〈五月を待って咲く橘の花の香りをかげと昔の人の袖の香りがする〉ということしか述べられていません。この少ない情報のすき間を埋めて、自分だけのオリジナルストーリー作りを楽しみましょう。細かいことは気にせず、まずは教科書に載っている歌の中から一つ選んでトライしてみてください。きっと、和歌を身近に感じることができるでしょう。

なぜ「祖父」と
「おじいちゃん」が
使い分けられているのだろう?

2年『タオル』

〈シライさんに見せてもらった写真〉、〈年賀状の手書きの字〉を見て徐々に悲しみを実感する少年。最後に〈タオルの潮のにおい〉を感じて涙を流します。少年はなぜ悲しみを実感できたのか、なぜ涙を流せたのか。手がかりは「祖父」と「おじいちゃん」の使い分けです。「おじいちゃん」と呼んでいる時、少年はどんな気持ちなのか考えてみましょう。

「君はそんなやつ
なんだな」と
言われたら……?

1年『少年の日の思い出』

「僕」はヤマユガという貴重なチョウを潰してしまいました。これはチョウの収集家として絶対に許されないことです。「僕」にとって「君はそんなやつなんだな」というエーミールの言葉は、「君はチョウの収集家失格だ」という宣告にほかならなかったことでしょう。その言葉を否定したくてもできない「僕」の思いを想像してみましょう。

「いいね」カード
を使おう!

3年『評価しながらスピーチを聞く』

スピーチを聞く活動でのひとことです。誰しも人前で話すのは緊張するもの。そこで、教科書の半分くらいのサイズの「いいね」マークのカードを用意します。最後まで話を聞いてから評価するのではなく、話している途中で、内容や話し方が「うまい!」と思ったら、どんどんカードをあげましょう。あげっぱなしにするのではなく、さっとあげてさっとおろす。反応がリアルタイムでわかることは話し手の安心感につながります。

席の向きを自由に
変えてみよう!

1年『お気に入りの一品を紹介する』

紹介したいことを話し合う活動でのひとことです。イラストで示される席の向きを自由に変えてみましょう。話す人をまん中にして並んで座り、両側の人聞いてみるなどしてはいかがでしょうか。背中合わせに座って聞き合うとどうでしょうか。向きの工夫ひとつで、話しやすさが変わります。

想像力は好きな
本との出会いから!

2年『「連作ショートショート」を書く』

物語などを創作する活動で、言葉が思い浮かばない場合には、好きな本の一節をもってきてはいかがでしょうか。私は、ある中学校の先生とお話する中で『夏の庭 The Friends』（湯本香樹美 新潮文庫）という本を教わりました。その本の中の章の始めに「おじいさんは、もうゴミをためたりしない。」という一文があります。「えっ、なんの話?」と思わず引き込まれます。よい本は一文でも続きを想像させる要素が詰まっていて、文章を書き始めるヒントになりますね。

やました なおし
専修大学 教授 山下 直

高校（国語科教員）、文部科学省、大学に務め、実践・行政・研究の立場から国語科教育について考えてきました。言語運用能力育成に関わる実践・研究に興味をもっています。

好きなもの・マイブーム

サザンオールスターズと阪神タイガースをこよなく愛しております。

先生がたへひとこと!

教材のおもしろさが見つかる授業をするのも楽しくなります。先生が楽しそうだと授業の雰囲気よくなります。授業の雰囲気よくなると生徒のいいところたくさん見えてきます。

すずき かずふみ
茨城大学 教授 鈴木 一史

私は東京大学教育学部附属中等教育学校で12年間教員をしていました。双子児の多い学校で、「個を見る」という教育の本質に関わる大切なことを学びました。現在は茨城大学で、学習者の言葉について現場の先生がたと一緒に考えています。

好きなもの・マイブーム

詩人・研究者の橋浦洋志先生と二人で同人誌『批評感覚』を発行し、評論や小説などを書き綴っています。創刊50号を超え、9年めに入りました。

先生がたへひとこと!

学校の外へ：教員の忙しさをかなぐり捨てて、学校の外でいるような経験をしてください。特に、ふだん自分が「興味がない」と思っていることを積極的に。